

---

# Cotton Candy 3

蜜月めぐむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

C o t t o n   C a n d y   3

### 【Nコード】

N 4 3 6 5 F

### 【作者名】

蜜月めぐむ

### 【あらすじ】

幼なじみの蛍樹と付き合っていた杏は、彼が弟の柊に惹かれていくことを知り、身を引こうと決心するが…。男まさりで不器用な杏の、切ない恋の行方。

## その1 浴衣（前書き）

前作から随分間が空きましたが、どうしても杏サイドから書きたくて。それにしても、下書きしていたのが夏だったせいで季節はずれも甚だしい…。お許しください。

## その1 浴衣

「浴衣なんか着ないって言ってるだろ」

「あらそんな、淋しいこと言わないで、袖だけでも通してごらんってば」

さつきから杏と母親の押し問答が続いている。

「着なよ、杏。チヨコも浴衣着るんだし。」

既に着付けを終えている柊の横で、チヨコが、うんうん、と頷く。

「一緒に着て行きましょ、杏さん。」

警戒心の強いウサギのようなチヨコが何故か、杏には無邪気な笑顔を見せている。ふわりと顔を覆う髪、色白でふっくらとした頬にくつきりと笑窪ができている。チヨコがいることで、そこだけ花畑のような空気が漂い、柊の母は、うっとり目を細めた。

「女の子がいるって、いいわねえ、やつぱり」

「一応、女の子、だよ、杏も」柊が笑う。

「杏さん、キレイだから、絶対似合います！」

浴衣、夜店、花火…なんだか嫌い。

理由はわからない。消えたんだか消したんだか

「ロクなことがない」という記憶から、今日まで避け続けていたのに。

あの朝の、蛭樹の一言がなければ…。

隣室のふたりを意識の外に追いやるために、Heavy Metal 100曲シャッフルで聴き続けた翌朝、顔を洗う杏に、蛭樹が囁いた。

「吹っ切れたよ。杏ちゃんのおかげで。」

冷たい水が流れ込んで、胸に刺さった感じがした。

「そう。ようやく本懐を遂げたんだ。」

「いや、あっさりフラれた。」「ふうん…それはお気の毒。」  
人ごとのように眩きながら喉につかえていた何か熱い塊になって  
上がってくるのを感じ、杏は思わずタオルに顔を押し付けた。

「だから、杏ちゃんだけは見捨てないでくれよな。」

はん！柀の身代わりなんて、やなことだ！私はそんなにお人好しじ  
やあない。そう言おうとしたのに、タオルの中で涙が止まらない。

「杏ちゃん。もう一度だけ、チャンスをくれよ。」

蛍樹の声に背を向けて部屋へと走った。封印したはずの想いが、溢  
れだし、零れ落ちた。

蛍樹を想っているうちに、杏はいつのまにか浴衣に袖を通してしま  
っていた。

母のなすがままにされながら、ミラーに映る自分が女の顔をしてい  
ることに、面映ゆさと甘い陶酔を感じて、杏は目を逸らした。

蛍樹は

「綺麗だ」と思ってくれるだろうか。

帯で締め付けられた胸がざわめく。

遠く、花火の上がる音が響いた。

## その1 浴衣（後書き）

忙しくて三ヶ月放置してしまっていたのに読んでくださっていた方がおられたと知り、また時間を見つけて頑張ろうと思えました。何か一言でも感想をいただけると嬉しいです。

## その2 花火

「いないね、ケイのやつ」柗は背伸びして辺りを見回す。花火大会の会場は大盛況だ。

「ていうか、この状況で待ち合わせって、無謀だし」小柄なチヨコは、柗と杏の袖をぎゅっと掴み、波間の小魚のように揺られながら、かろうじて迷子にならずにいた。

杏は痛いほどの鼓動を抑え見慣れた蛸樹の姿を捜した。会えなかったらどうしよう、なんていう焦りも、初めて味わった。どこ？ケイ…。

「あ、あそこ、ちょっと空いてるから、行って待ってようよ。」柗の指す街灯の下に、ぼっかり広い空間ができています。近寄りかけて三人は凍りついた。

ヤバそうな人がいる！

スキンヘッドでサングラス、派手なアロハシャツ、大きく開いた胸元に光る鎖。人が避けて通るわけだ。踵を返す三人に、その男が気づいた。

「あ、お〜い、杏ちゃん！」

サングラスを外し、満面の笑みで、蛸樹が手を振った。

ドドン！

花火が夜空を彩り、歓声が上がった。

「たーまや〜！」

「ばかっやめろよ、目立つだろっ」

杏が蛸樹の背中を思い切り叩く。いつも以上にハイテンションな蛸樹に、柗も苦笑いして一歩ひいている。

「ケイ、合宿抜けてここに来てるのバレちゃまずいんじゃないの？静かにしてなよ」

「お、そうだった。グラスン、グラスン！」

「もう遅えよ。てか、不自然だよ、それ」

「杏：せっかくの浴衣が台なしだよ、その言葉遣い」

いいんだよ、もう…。杏は心の中で呟いた。だって、コイツ、何にも言ってくれないし、こつちをまともに向いてもくれないし。こんな格好してドキドキして、ばかみたい…。

「とにかく、チヨコがケイのこと嫌って離れたがってるからさ、僕たち何か夜店で買ってくるね」

花火の轟音と歓声に掻き消されながら、柊はかろうじて杏に伝えると、チヨコの手を引いて去った。

そのことを耳元で伝えようと蛍樹に向き直り、杏は声を呑み込んだ。真顔で二人を見送る蛍樹の眼が、虚ろで冷たい眼だったからだ。ケイ、やっぱり今も…。

「杏ちゃん、俺らも何か買いに行こうか」

「え、いや、だめだよ、動いたらあの子たちとはぐれるよ。ここにいなきゃ…って、聞けよ！ケイ！」

聞こえていないのか、杏の手首を掴んで早足に進む蛍樹。慣れない下駄の鼻緒が足に食い込んで痛い。

「痛いから！止まってよ、ねえっ！」

杏が蛍樹の手を振りほどくと、二人はあっという間に人混みに引き離された。

「…バカヤロウ…」

涙が込み上げる。杏は流されるまま、別方向に歩き出した。そうだ…六年生の夏だった。初めて浴衣で花火を見に来たときだ。あの日もさんざんだったっけ。

「だから浴衣はいやだって言ったんだ…」

その時、肩に温かい手がふれた。

「あれえ？姫、お一人い？」

「俺たちとご一緒しない？」

顔を上げると、見知らぬ男たちが、笑っていた。

### その3 水ヨーヨー

「あれ〜？泣いてんの？」

「誰に泣かされたのかなあ。悪いヤツだなあ、カレシィ？」

「そんなヤツなんか、忘れて遊びにいこうぜ！」

「ぼくちゃんカラオケがいい〜」

両腕を掴まれ、五人の男に囲まれ、杏は逃げることも出来ない。

普段の杏なら振り払い、必要とあればビンタ何発か食らわせて怒鳴りつけ蹴散らすことのできる相手だ。

しかし、慣れない浴衣姿が動きづらいただけでなく、今の杏には拒む気力がない。

ふらふらと、促されるまま歩きはじめた杏の下駄がコトリ、と脱げた。

素足に砂利が痛い。

もう、どうにでもなれ。

「杏！」

柊の声に、杏は我に返った。

「杏、ついてっちゃだめだ！」

柊が男たちの前に立ち塞がった。

「コイツがカレシ？マジ〜」

「てか、アンちゃんって言うんだ〜、かわいー名前じゃん」

「こんな女みてーなシヨボいやつ置いといて、行こ行こ！」

柊がキツと睨みつける。

しかし、空気が張りつめたのは、そのせいではなかった。

「…誰が『女みたい』だつて？」

杏の拳に力が戻った。

右の男の手を振り払うと、

「女みたい」と言った左側の男の腕を掴み、振りあげる。

「つたたた、なにしゃがる！」

「杏！後ろっ」

すでに二人の男に取り押さえられている柊が叫ぶ。

「捕まえた。気の強いお姫様もキライじゃないよ」

一番柄の大きい男が後ろから杏を抱きすくめると、耳元で声色を変えた。「暴れたらアイツに何するかわかんないよ？こいつらキレたら怖いからね」

「柊！！」

だめだ！この男、力が強い。ケイは…ケイ、早く来て！！

その時、頭上で何かが破裂した。

「ストライク」

夜店の明かり照らされて、投球フォームの蛍樹が見えた。

「うわっ冷てえ！」

次の瞬間、顔面に水ヨーヨーを食らって、顔を押しやる男たちの前に、サングラスをかけたガラの悪い大男が立ち塞がっていた。

#### その4 法被(はつび)

男たちは一瞬怯んだが、怒りの色をあらわにし、蛍樹を取り囲んだ。物騒な空気が辺りを包み、がやがやと野次馬が集まり始めている。

「ケイ！絶対、手出しちゃだめだよ！」

柊の叫びは怒号に掻き消され、次の瞬間、蛍樹の強いパンチが一人の腹に入った。それを合図に、対五の乱闘が始まった。

見物人が無責任に囃し立てる。

呆然と座り込む杏を抱き起こしながら柊は叫ぶようにチヨコを呼んだ。

「こつちです！早く来て！」

チヨコの高い声が響く。

どやどやと人波を掻き分け、揃いの法被を纏った大人たちが割って入った。

「やめんかーお前らー。せつかくの祭が台なしじゃがー」

穏やかに、しかし強い口調で、白髪頭に振り八チマキの老人が諭す。

「わしら、この花火大会の世話役じゃ。皆さんが楽しみにしてるこの祭を乱して迷惑かけるようなら、容赦はせんぞ。」

抗いながらも、法被の大人たちに引き離され宥められ、男たちは捨てぜりふを残して去って行った。

柊とチヨコは、集まった『花火大会実行委員会』の人々に、ひたすら頭を下げ弁明した。

杏は、まだ息の荒い蛍樹の横で声もなく佇んでいる。

法被姿の大人たちが立ち去ると、柊がいきなり蛍樹に掴みかかり頬を殴った。

大柄な蛍樹がグラリと揺れた。

「なにやってんだよ！ケイ！なんで杏を一人にした？こんな危ない目にあわせて」

「ああ、わりい…」「チヨコが連れて来たのが警察だったら、どうすんだよ。ケンカなんて、お前の部にも迷惑かけんだぞ。」

「…そうだな。忘れてた」

視線をそらす蛍樹の、肩を落とした背中が、柊には小さく見えた。震える声で柊が呟く。

「僕の知ってる蛍樹は、もっと強くて賢いヤツだった。お前に杏は似合わない」

行こう、と小声でチヨコに呼びかけると、柊は蛍樹に背を向けた。

「…杏さん、帰ろ」

チヨコが杏の肩にそっと触れる。すると、杏はまるで電気に打たれたようにハツとし、蛍樹に向かって駆けだした。

「杏！！」

「佐藤ちゃん…二人にしてあげよ」

チヨコは柊の手をとり、引っ張った。

## その5 残像

花火がクライマックスを迎え、絶え間なく鳴り響く音とともに鮮やかな光の花が夜空を照らす。

感嘆の聲が上がリ、夢心地な笑顔が光に照らし出されている。その光に背を向け、柊はチヨコの手を引いて、スタスタ進む。肩が触れても二人を気に留める人はいない。誰も皆、灯っては消える刹那の光に魅入られているようだ。

「ね、佐藤ちゃん？」

「柊でいいよ。」

「じゃ、柊くんて呼ぶね」

「いいけど。」

「わたし、男の子と花火見に来たの、初めてなんだ……」  
チヨコの歩調が遅くなる。はっとして、柊が振り向く。

「あ……。ごめん。ちゃんと見れなかったね」

「最後だけ、見てもいい？」

「うん。ここから、でもいいかな。よく見えないけど……」

花火大会の会場出口まで来ていた二人は、少し外れた堤防に腰を下ろした。

辺りには、喧騒を嫌った家族連れや恋人連れが、ちらほら見える程度だ。

ファイナーレの花火が、キラキラの粉を夜空に振り撒く。

一瞬の煌めきが二人の目に残像を焼き付ける。

堤防の上で、チヨコは柊の肩に頭をのせる。

甘い香が微かに漂う。

僕は今日、何に焦り、何に苛立っていたんだろう。

「あのひと、必死だったよ」

「ケイのこと？」

「うん。柊くんが捜して来てって言ったでしょ。あのひと、大声で杏さんと呼んでたから、すぐ見つかったの。で、杏さんがからまれ  
てるって言ったなら」

「ダツシユ？」

「そう。あ、ヨーヨー貸せて、持ってった。めっちゃ速かったよ  
チヨコのダツシユの身振りがおかしくて、柊が笑った。」

「あのひと、杏さんを守るうとしてたよ。だからケンカしたんだと  
思う」

「…ばかだよ」

「自分のこと、忘れるくらい、必死だったんだよ、たぶん」

「ケイが嫌いなくせに、庇うんだ、チヨコは」  
笑顔が曇る。

「ね、柊くんは、今日、あのひとにどうして欲しかったの？杏さん  
ともっとベタベタして欲しかった？それって、誰のために？」

ずっと心に何かがひっかかっている、それが苛立ちの原因だったの  
だと、柊はやつと気づいた。

柊の心にあるクロスワードパズルを、チヨコのヒントで解いていく。  
「杏のため、だろうな…あ、でも」

違う。僕のためだ。蚩樹の告白で、僕らは惹かれ合っていたことを  
知った。それでも二人で封印しようと思った。

でも…本当は自信がなかったんだ。

杏との睦まじい姿を見たら、きつとこのモヤモヤが晴れる。  
だから、この日をセツティングした。

「チヨコ、僕は…」

「わたし、浴衣、似合ってる？」

柊を遮るように、チヨコが笑いかける。

まるで、なにもかも見通していたように。  
思わず、柊はチヨコの体を抱きしめた。

「うん。かわいいよ。誰よりも。」  
僕には、きみがいる。

花火の余韻を残す夜空に、月が静かに光っていた。

## その6 月夜

「ケイ…痛いトコない…?」

下駄をなくして歩けない杏は蛍樹の背に負われている。

「ああ。全然大丈夫。それよか、ごめんな、杏ちゃん」

柊たちが去った道を、傷だらけの重い足どりで蛍樹は歩く。

「俺、ほんと、どうかしてるよな。」

蛍樹の呟きに杏が首を横に振る。

どうかしてるのは、私のほう。こんな情けない格好になってしまったのに。

今、泣きたいくらい、ケイが好きだ、って感じる。心臓が痛くなるくらい、好き。

蛍樹の太い首に、腕をまわす。

目の前にある耳に、この想いを素直に言えたらいいのに。

杏は言葉の出ない唇を噛み締める。

「なあ、たしか前もこんなこと、あったよな。浴衣の杏ちゃん背負って帰るの。」

「…うん。小学の頃。」

「あれ以来だっけ。花火も」

「私は、ね。ケイは柊と行ってたじゃん」

「だっけ? あんま、覚えてねえや。あの年が印象的すぎて。」

「私は忘れてたよ。ていうか、忘れたかったよ。」「そーだろーなあ」

蛍樹が肩を揺らして笑う。

「掬った金魚は、野良犬に食われるわ、転んで、石段から落ちるわ、べそかいて…」

「う、うるさいっ、それも全部あんたたちが私のこと無視してたせいじゃん!」

「無視？した覚えはないけど…」

「してた！話しかけても、そっぽ向いて、柎とばかりしゃべってさ。」

「あ〜」

笑いながら蛭樹は頷き、足を止めた。

そこに杏が昔、転んだ石段があつたからだ。「この上の神社が、花火の隠れスポットだったんだよな…」

「話そらすなっ！」

「な、寄っていかね？一休みしに。」

「無理。昇れないよ。足痛くて」

「任せなさい」

よいしょっ、と杏をしょい直すと、蛭樹は勢いよく昇りはじめた。

「きゃっ、落ちる、落ちるってば！」

揺れる背中。振り落とされないように、しがみつく。

蛭樹の首に頬を押し付ける。あの頃、華奢で頼りなかったケイ…今はこんなにも、力強い。「ほーら、ついた。こんなもん、楽勝、つーの」

「息、あがつてんじゃん、そのわりに。」

口を開くと、こんな言葉しかでてこない。

心と頭が、別行動だ…。

境内のベンチに、腰を下ろすように杏を降ろし、二人は並んで座つた。

知るひとぞ知る花火の名所も、すでに人影はまばらで、心地よい夜風だけが二人を包む。

「杏ちゃんといると、さ、時々緊張するんだよ」

「え。」

「あの時も、今日も、いつもと違ってて、なんつつつか…」  
頭を抱えて、蛭樹は言葉を探している。

「すげー月並みだけど、綺麗でさ。」

「…ばか。」

ドクン、ドクン。心臓の音が聞こえそうので、杏は思わず胸を押さえる。

鬱陶しい、無ければいい、と思っていた膨らみが、何故だか愛おしい。

「どうしていいか解らなくなるんだ。触れたいけど、触れていいのか、触れちゃいけないのか。」

蛭樹は急に饒舌になる。

「基本的に杏ちゃんと柊は同じ顔だろ？双子か？っていうくらい。

でも、アイツとはじゃれ合える。だって、アイツ男だから。緊張は、しないんだ。」

もう、いいよ、ケイ。

「俺、単に杏ちゃんたち姉弟が羨ましかっただけかもしれない。つまりスコンでブラコンなだけかも。仲がいいから嫉妬してただけかも。あーよくわかんねー。俺、また混乱してきたわ。俺は結局…」  
唐突に、杏が蛭樹の唇を塞ぐ。驚いた蛭樹の宙に浮いた手が杏の体に触れるまで、キスは続いた。

「杏、ちゃん…」

「杏でいい。なんでもいい。」涙が頬をつたう。

もう、我慢なんて、しない。

「やっぱり、ケイが欲しい」

至近距離で瞳がぶつかる。もう、嘘はつけない。つかない。切れ長の黒い瞳に、震える杏が映る。

「俺…でいいのか」

蛭樹の指が杏の髪に触れ、耳たぶから頬へ、確かめるようにたどる。杏の、涙で湿った頬を両手で挟み、蛭樹から唇を重ねる。

何度も、何度も。きつく抱きしめ、薄い布に隔てられた体温を確かめ合う。

遠いざわめきすら、もうふたりの耳には届かない。

このまま、時が止まればいい、と杏は薄くなり溶けてゆく理性のな

かで思った。

夜空で咲き、枯れてしまう光の花みたいに、もう私という存在が消えても構わない。

湧き上がる想いも、熱くほてるこの体も、すべて蛍樹に委ねたい…。  
いますぐ…。

月が二人をかくまうように、そっと雲に隠れた。

## その6 月夜（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます！このあとのことまで書けません…。どうでしたか？どんなことでもいいので、感想お聞かせください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4365f/>

---

Cotton Candy 3

2011年1月16日14時44分発行